Ⅱ　調査結果の概要

１　発育状態

（１）　身長（表１，表２，図１，図２）

①　平成22年度の男子の身長（全国平均値。以下同じ。）は，７歳から12歳，14歳，15歳及び17歳で前年度の同年齢より減少している。また，その他の年齢では,前年度と同じ数値となっている。

女子の身長は，13歳及び17歳で前年度の同年齢より増加している。また，５歳，８歳，10歳，11歳，14歳及び15歳で前年度より減少している。

②　平成22年度の身長を親の世代（30年前の昭和55年度の数値。以下同じ。）と比較すると，最も差がある年齢は，男子では13歳で2.8cm高くなっている。女子では10歳及び11歳で,親の世代より1.9cm高くなっている。

③　なお，男子，女子共に昭和23年度以降，増加傾向にあったが，平成９年度から平成13年度あたりにピークを迎え，その後横ばい傾向となっている。

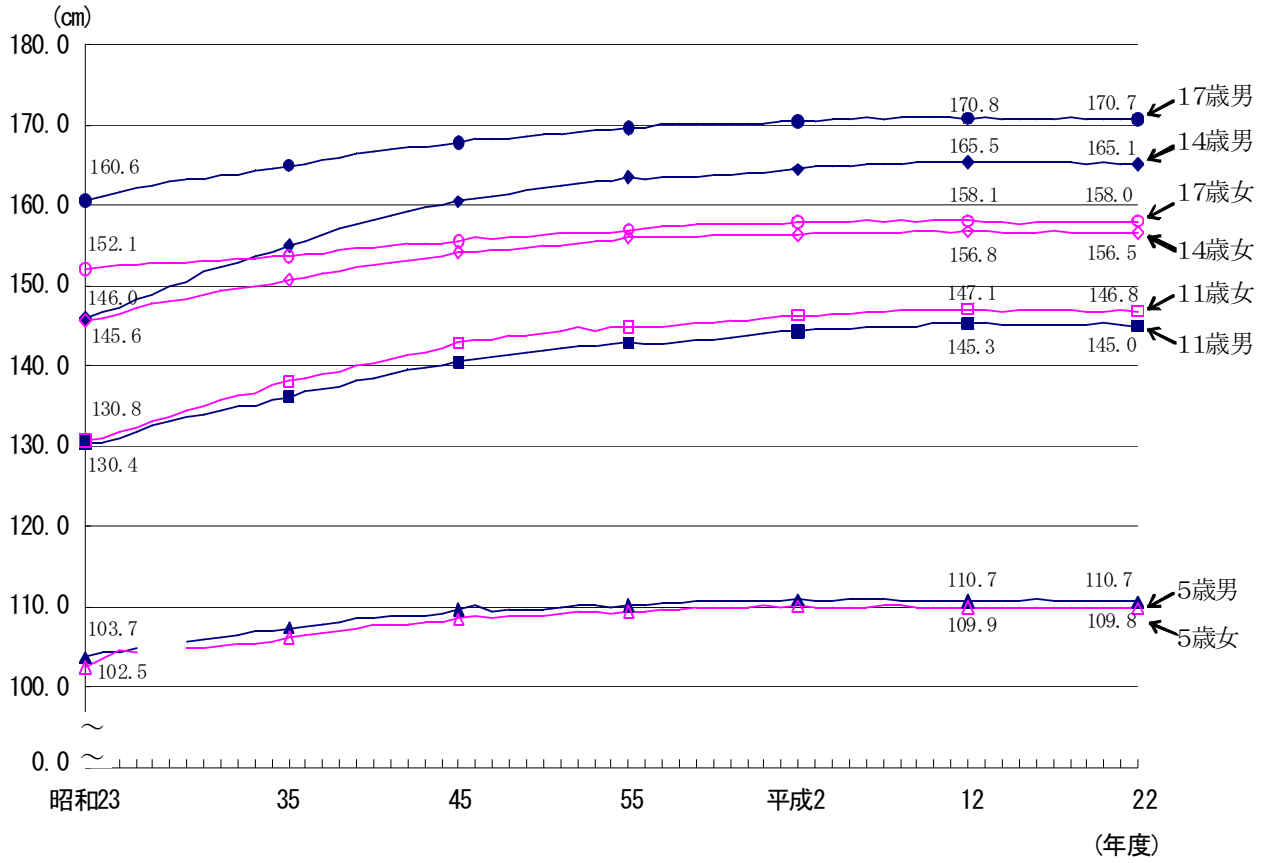
表１　年齢別　身長の平均値

（cm）

区分			平成22年度 A	平成21年度	昭和55年度 B（親の世代）	差 A－B
男	幼稚園	5歳	110.7	110.7	110.3	0.4
	小学校	6歳	116.7	116.7	115.8	0.9
		7	122.5	122.6	121.4	1.1
		8	128.2	128.3	126.9	1.3
		9	133.5	133.6	132.0	1.5
		10	138.8	138.9	137.3	1.5
		11	145.0	145.1	142.9	2.1
	中学校	12歳	152.4	152.5	149.8	2.6
		13	159.7	159.7	156.9	2.8
		14	165.1	165.2	163.6	1.5
	高等学校	15歳	168.2	168.5	167.0	1.2
		16	169.9	169.9	168.9	1.0
		17	170.7	170.8	169.7	1.0
女	幼稚園	5歳	109.8	109.9	109.4	0.4
	小学校	6歳	115.8	115.8	114.9	0.9
		7	121.7	121.7	120.6	1.1
		8	127.4	127.5	126.2	1.2
		9	133.5	133.5	131.9	1.6
		10	140.2	140.3	138.3	1.9
		11	146.8	146.9	144.9	1.9
	中学校	12歳	151.9	151.9	150.6	1.3
		13	155.0	154.9	154.0	1.0
		14	156.5	156.7	156.0	0.5
	高等学校	15歳	157.1	157.3	156.6	0.5
		16	157.7	157.7	156.9	0.8
		17	158.0	157.9	157.0	1.0

（注）年齢は，各年４月１日現在の満年齢である。以下の各表において同じ。

図１　身長の平均値の推移



（注）５歳については，昭和27年度及び昭和28年度は，調査していない。

④　17歳（平成４年度生まれ）の年間発育量をみると，男子では11歳時及び12歳時に発育量が著しくなっており，11歳時に最大の発育量を示している。

女子では，９歳時及び10歳時に発育量が著しくなっており，最大の発育量を示している。最大の発育量を示す年齢は，女子のほうが男子に比べ２歳早くなっている。

また，この発育量を親の世代と比較すると，男子では発育量が最大となる時期は１歳早い11歳時となっており，５歳，７歳及び９歳から11歳の各歳時で親の世代を上回っている。

女子については，発育量が最大となる時期は親の世代より１歳早い９歳時及び親の世代と同じ10歳時となっており，５歳及び７歳から９歳の各歳時で親の世代を上回っている。

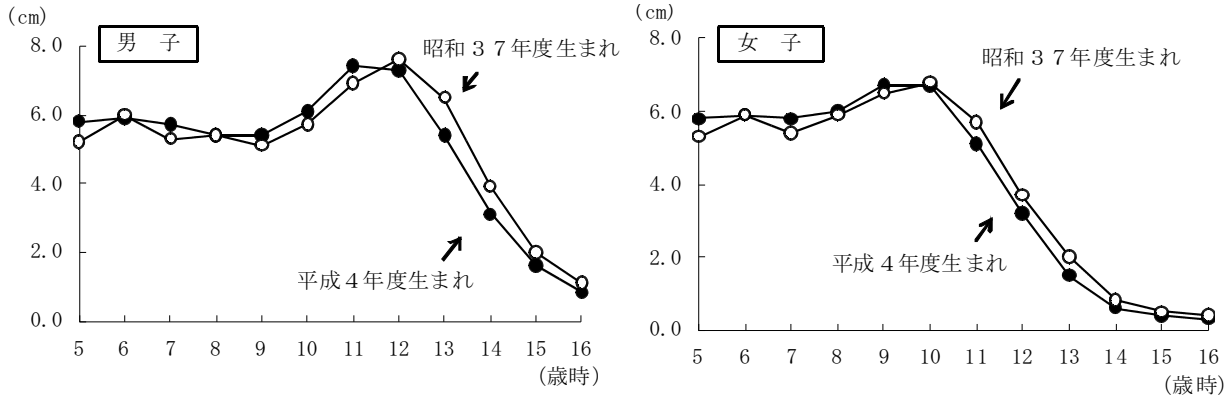
表２　平成４年度生まれと昭和37年度生まれの者の年間発育量の比較（身長）

（cm）

区分		男子		女子	
		平成４年度生まれ（平成22年度17歳）	昭和37年度生まれ（親の世代の17歳）	平成４年度生まれ（平成22年度17歳）	昭和37年度生まれ（親の世代の17歳）
総発育量		59.9	60.7	48.0	48.9
幼稚園	5歳時	5.8	5.2	5.8	5.3
小学校	6歳時	5.9	6.0	5.9	5.9
	7	5.7	5.3	5.8	5.4
	8	5.4	5.4	6.0	5.9
	9	5.4	5.1	6.7	6.5
	10	6.1	5.7	6.7	6.8
	11	7.4	6.9	5.1	5.7
中学校	12歳時	7.3	7.6	3.2	3.7
	13	5.4	6.5	1.5	2.0
	14	3.1	3.9	0.6	0.8
高等学校	15歳時	1.6	2.0	0.4	0.5
	16	0.8	1.1	0.3	0.4

（注）１．年間発育量とは，例えば，平成４年度生まれの「５歳時」の年間発育量は，平成11年度調査６歳の者の身長から平成10年度調査５歳の者の身長を引いたものである。
２．網掛け部分は，最大の年間発育量を示す。

図２　平成４年度生まれと昭和37年度生まれの者の年間発育量の比較（身長）



（２）　体重（表３，表４，図３，図４）

①　平成22年度の男子の体重（全国平均値。以下同じ。）は，13歳，14歳及び16歳で前年度の同年齢より増加している。また，６歳，７歳，９歳，10歳及び12歳で前年度より減少している。

女子の体重は，14歳及び16歳で前年度より減少している。また，その他の年齢では前年度と同じ数値となっている。

②　平成22年度の体重を親の世代と比較すると，最も差がある年齢は，男子では12歳で2.7kg重くなっている。

女子では11歳で,親の世代より1.7kg重くなっている。

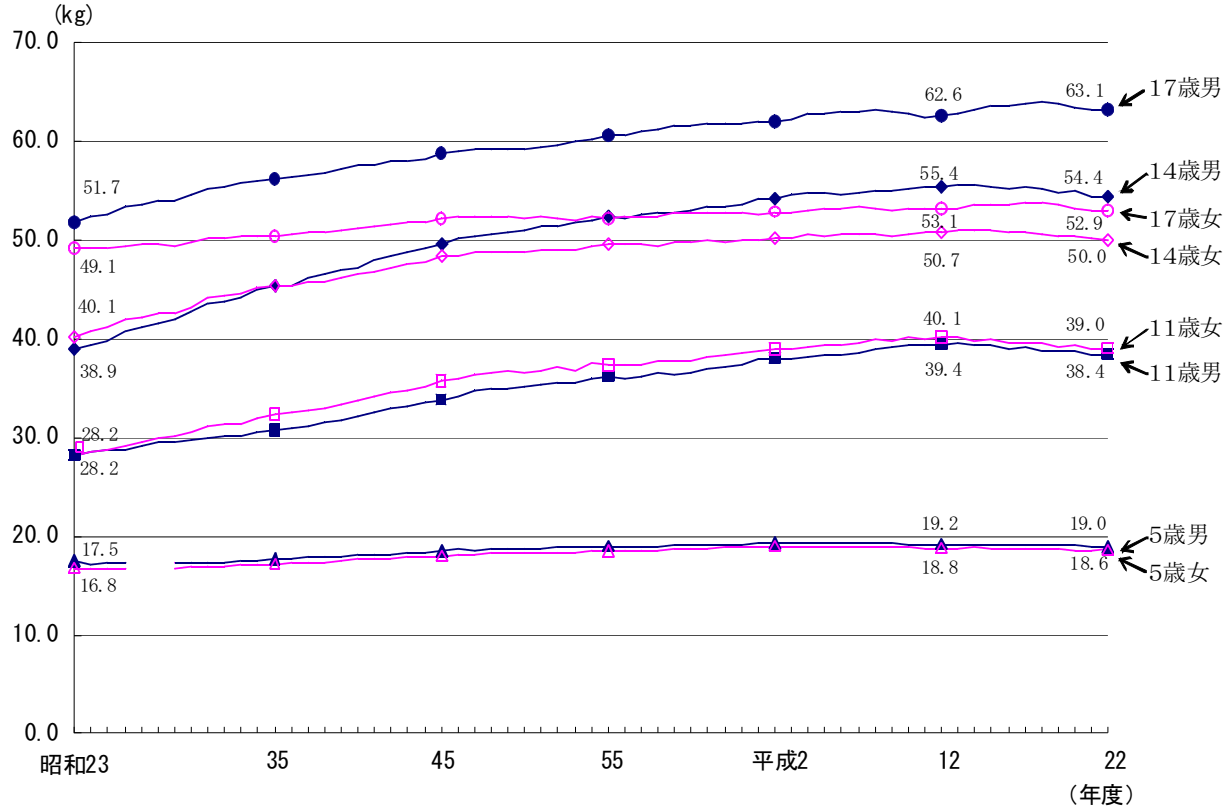
③　なお，男子，女子共に昭和23年度以降，増加傾向にあったが，平成10年度から平成15年度あたりにピークを迎え，その後減少傾向となっている。

表３　年齢別　体重の平均値

（kg）

区分			平成22年度 A	平成21年度	昭和55年度 B（親の世代）	差 A－B
男	幼稚園	5歳	19.0	19.0	19.0	0.0
	小学校	6歳	21.4	21.5	20.8	0.6
		7	24.0	24.1	23.2	0.8
		8	27.2	27.2	26.0	1.2
		9	30.5	30.6	28.9	1.6
		10	34.1	34.2	32.4	1.7
		11	38.4	38.4	36.2	2.2
	中学校	12歳	44.1	44.2	41.4	2.7
		13	49.2	49.1	46.7	2.5
		14	54.4	54.3	52.4	2.0
	高等学校	15歳	59.5	59.5	56.9	2.6
		16	61.5	61.3	59.2	2.3
		17	63.1	63.1	60.6	2.5
女	幼稚園	5歳	18.6	18.6	18.5	0.1
	小学校	6歳	21.0	21.0	20.3	0.7
		7	23.5	23.5	22.6	0.9
		8	26.5	26.5	25.5	1.0
		9	30.0	30.0	28.5	1.5
		10	34.1	34.1	32.6	1.5
		11	39.0	39.0	37.3	1.7
	中学校	12歳	43.8	43.8	42.6	1.2
		13	47.3	47.3	46.5	0.8
		14	50.0	50.2	49.6	0.4
	高等学校	15歳	51.6	51.6	51.4	0.2
		16	52.7	52.8	52.2	0.5
		17	52.9	52.9	52.1	0.8

図３　体重の平均値の推移



（注）５歳については，昭和27年度及び昭和28年度は，調査していない。

④　17歳（平成４年度生まれ）の年間発育量をみると，男子では11歳時から14歳時に発育量が著しくなっており，11歳時に最大の発育量を示している。

女子では，10歳時及び11歳時に発育量が著しくなっており，10歳時に最大の発育量を示している。

また，この発育量を親の世代と比較すると，男子では発育量が最大となる時期は，１歳早い11歳時となっており，11歳以下の各歳時及び14歳時で親の世代を上回っている。

女子については，発育量が最大となる時期は親の世代より１歳早い10歳時となっており，10歳以下の各歳時及び16歳時で親の世代を上回っている。

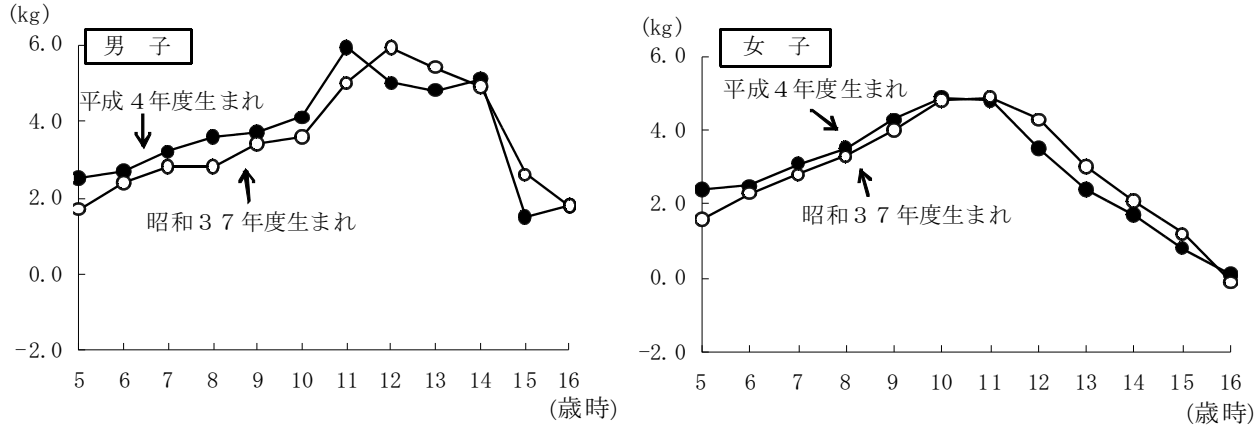
表４　平成４年度生まれと昭和37年度生まれの者の年間発育量の比較（体重）

(kg)

区分	男子		女子	
	平成４年度生まれ（平成22年度17歳）	昭和37年度生まれ（親の世代の17歳）	平成４年度生まれ（平成22年度17歳）	昭和37年度生まれ（親の世代の17歳）
総発育量	43.9	42.3	34.0	34.2
幼稚園 5歳時	2.5	1.7	2.4	1.6
小学校 6歳時	2.7	2.4	2.5	2.3
7	3.2	2.8	3.1	2.8
8	3.6	2.8	3.5	3.3
9	3.7	3.4	4.3	4.0
10	4.1	3.6	4.9	4.8
11	5.9	5.0	4.8	4.9
中学校 12歳時	5.0	5.9	3.5	4.3
13	4.8	5.4	2.4	3.0
14	5.1	4.9	1.7	2.1
高等学校 15歳時	1.5	2.6	0.8	1.2
16	1.8	1.8	0.1	△ 0.1

（注）１．年間発育量とは，例えば，平成４年度生まれの「５歳時」の年間発育量は，平成11年度調査６歳の者の体重から平成10年度調査５歳の者の体重を引いたものである。
２．網掛け部分は，最大の年間発育量を示す。

図４　平成４年度生まれと昭和37年度生まれの者の年間発育量の比較（体重）



（３）　座高（表５）

①　平成22年度の男子の座高（全国平均値。以下同じ。）は，13歳，16歳及び17歳で前年度の同年齢より増加している。また，７歳及び10歳で前年度より減少している。

女子の座高は，13歳及び17歳で前年度の同年齢より増加している。また，11歳で前年より減少している。

②　平成22年度の座高を親の世代と比較すると，最も差がある年齢は，男子では13歳で1.7㎝高くなっている。

女子では10歳及び11歳で,親の世代より1.0㎝高くなっている。

表５　年齢別　座高の平均値

(cm)

区分			平成22年度 A	平成21年度	昭和55年度 B(親の世代)	差 A－B
男	幼稚園	5歳	61.9	61.9	62.4	△ 0.5
	小学校	6歳	64.9	64.9	64.9	0.0
		7	67.6	67.7	67.4	0.2
		8	70.3	70.3	69.8	0.5
		9	72.7	72.7	72.0	0.7
		10	74.9	75.0	74.2	0.7
		11	77.6	77.6	76.6	1.0
	中学校	12歳	81.3	81.3	79.9	1.4
		13	85.0	84.9	83.3	1.7
		14	88.1	88.1	86.8	1.3
	高等学校	15歳	90.3	90.3	89.1	1.2
		16	91.3	91.2	90.1	1.2
		17	91.9	91.8	90.6	1.3
女	幼稚園	5歳	61.5	61.5	61.8	△ 0.3
	小学校	6歳	64.5	64.5	64.4	0.1
		7	67.3	67.3	66.9	0.4
		8	70.0	70.0	69.5	0.5
		9	72.7	72.7	71.9	0.8
		10	75.9	75.9	74.9	1.0
		11	79.2	79.3	78.2	1.0
	中学校	12歳	82.1	82.1	81.5	0.6
		13	83.8	83.7	83.3	0.5
		14	84.8	84.8	84.4	0.4
	高等学校	15歳	85.3	85.3	84.9	0.4
		16	85.6	85.6	85.0	0.6
		17	85.8	85.7	85.0	0.8

（注）下線の部分は、調査実施以来過去最高を示す。

２　健康状態

（１）　疾病・異常の被患率等別状況（表６）

疾病・異常を被患率等別にみると，幼稚園，小学校，高等学校においては「むし歯（う歯）」が最も高く，次いで「裸眼視力 1.0未満の者」の順となっている。

中学校においては，「裸眼視力1.0未満の者」が最も高く，次いで「むし歯（う歯）」の順となっている。

表６　疾病・異常の被患率等

区分		幼稚園	小学校	中学校	高等学校
90%以上					
80%以上～90%未満					
70 ～ 80					
60 ～ 70					
50 ～ 60			むし歯（う歯）	裸眼視力1.0未満の者 むし歯（う歯）	むし歯（う歯） 裸眼視力1.0未満の者
40 ～ 50		むし歯（う歯）			
30 ～ 40					
20 ～ 30		裸眼視力1.0未満の者	裸眼視力1.0未満の者		
10 ～ 20			鼻・副鼻腔疾患	鼻・副鼻腔疾患	
1 ～ 10	8 ～10				鼻・副鼻腔疾患
	6 ～ 8		歯・口腔のその他の疾病・異常		
	4 ～ 6		耳疾患 眼の疾病・異常 歯列・咬合 ぜん息	歯垢の状態 歯列・咬合 歯肉の状態 眼の疾病・異常	歯垢の状態 歯肉の状態 歯列・咬合
	2 ～ 4	鼻・副鼻腔疾患 耳疾患 アトピー性皮膚炎 歯列・咬合 ぜん息 眼の疾病・異常	歯垢の状態 アトピー性皮膚炎 心電図異常 歯肉の状態	耳疾患 歯・口腔のその他の疾病・異常 心電図異常 ぜん息 蛋白検出の者 アトピー性皮膚炎	眼の疾病・異常 心電図異常 蛋白検出の者 アトピー性皮膚炎 ぜん息
	1 ～ 2	口腔咽喉頭疾患・異常 歯・口腔のその他の疾病・異常 その他の皮膚疾患 蛋白検出の者	栄養状態 口腔咽喉頭疾患・異常 難聴	栄養状態	耳疾患
0.1 ～ 1	0.5 ～ 1	歯垢の状態	蛋白検出の者 心臓の疾病・異常	口腔咽喉頭疾患・異常 せき柱・胸郭 心臓の疾病・異常 難聴 顎関節	栄養状態 歯・口腔のその他の疾病・異常 難聴 心臓の疾病・異常 顎関節 口腔咽喉頭疾患・異常 せき柱・胸郭
	0.1 ～ 0.5	心臓の疾病・異常 言語障害 栄養状態 歯肉の状態 せき柱･胸郭	その他の皮膚疾患 言語障害 せき柱・胸郭 寄生虫卵保有者 顎関節 腎臓疾患	その他の皮膚疾患 腎臓疾患 尿糖検出の者	尿糖検出の者 腎臓疾患 その他の皮膚疾患
0.1%未満		寄生虫卵保有者 顎関節 腎臓疾患	尿糖検出の者 結核	言語障害 結核	言語障害 結核

（注）１．「口腔咽喉頭疾病・異常」とは，アデノイド，へんとう肥大，咽頭炎，喉頭炎，へんとう炎，音声言語異常のある者等である。
２．「歯・口腔のその他の疾病・異常」とは，口角炎，口唇炎，口内炎，唇裂，口蓋裂，舌小帯異常，だ石，癒合歯，要注意乳歯等のある者等である。
３．「心電図異常」とは，心電図検査の結果，異常と判定された者である。
４．「その他の皮膚疾患」とは，伝染性皮膚疾患，毛髪疾患等，アトピー性皮膚炎以外の皮膚疾患と判定された者である。

（２）　主な疾病・異常等の推移

疾病・異常等のうち主なものについて，その推移をみると表７のとおりである。

表７　主な疾病・異常等の推移総括表

(%)

区分		裸眼視力1.0未満の者	耳疾患	鼻・副鼻腔疾患	口腔咽喉頭疾患・異常	むし歯（う歯）	心電図異常	蛋白検出の者	寄生虫卵保有者	ぜんそく
幼稚園	平成12年度	28.69	1.90	3.29	3.06	64.43	…	0.42	0.75	1.33
	18	24.07	2.93	3.40	1.96	55.20	…	0.54	0.17	2.36
	19	26.21	2.57	3.68	2.37	53.70	…	0.68	0.15	2.23
	20	28.93	2.80	3.78	1.74	50.25	…	0.49	0.12	2.65
	21	24.87	2.91	3.98	1.96	46.50	…	0.62	0.15	2.15
	22	**26.43**	**3.34**	**3.39**	**1.86**	**46.07**	**…**	**1.01**	**0.09**	**2.74**
小学校	平成12年度	25.33	4.12	11.28	2.17	77.87	2.08	0.63	1.44	2.45
	18	28.36	4.87	11.94	1.93	67.80	2.32	0.67	0.47	3.74
	19	28.07	5.13	11.99	1.83	65.47	2.49	0.66	0.41	3.91
	20	29.87	5.23	11.86	1.75	63.79	2.67	0.69	0.33	3.89
	21	29.71	5.47	12.57	1.63	61.79	2.51	0.81	0.30	3.99
	22	**29.91**	**5.43**	**11.66**	**1.52**	**59.63**	**2.48**	**0.75**	**0.27**	**4.19**
中学校	平成12年度	49.99	2.50	9.42	1.01	76.85	3.11	1.99	…	1.81
	18	50.13	3.13	10.67	1.07	59.66	3.34	2.27	…	2.95
	19	51.17	3.33	11.14	1.00	58.06	3.24	2.41	…	3.08
	20	52.60	3.55	10.82	1.10	56.00	3.45	2.49	…	3.00
	21	52.54	3.35	10.83	0.81	52.88	3.28	2.46	…	2.96
	22	**52.73**	**3.56**	**10.67**	**0.82**	**50.60**	**3.36**	**2.61**	**…**	**3.02**
高等学校	平成12年度	62.45	1.17	7.10	0.79	85.03	2.85	1.81	…	1.32
	18	58.65	1.67	8.18	0.74	70.06	3.51	2.43	…	1.71
	19	55.41	1.72	8.43	0.55	68.48	3.23	2.49	…	1.80
	20	57.98	2.02	8.81	0.59	65.48	3.10	2.82	…	1.82
	21	59.37	2.01	9.61	0.68	62.18	3.33	2.88	…	1.88
	22	**55.64**	**1.61**	**8.45**	**0.58**	**59.95**	**3.16**	**2.84**	**…**	**2.08**

（注）　１．心電図異常については，６歳，12歳，15歳のみ実施している。
　　２．寄生虫卵保有者については，５歳から８歳のみ実施している。

○　「裸眼視力」（表８，図５）

①　平成22年度の「裸眼視力1.0未満の者」の割合は，幼稚園26.43％，小学校29.91％，中学校52.73％，高等学校55.64％となっており，前年度と比較すると，高等学校を除いて増加している。また，「裸眼視力0.3未満の者」の割合は，幼稚園0.79％，小学校7.55％，中学校22.25％，高等学校25.90％となっており，前年度と比較すると，高等学校を除いて増加している。

なお，「裸眼視力1.0未満の者」及び「裸眼視力0.3未満の者」の割合は，昭和54年度以降，増加傾向となっている。ただし，高等学校の「裸眼視力1.0未満の者」及び「裸眼視力0.3未満の者」については，ここ10年，減少傾向となっている。

②　年齢別（図５）にみると，「裸眼視力0.3未満の者」の占める割合は年齢が進むにつれて高くなる傾向がある。

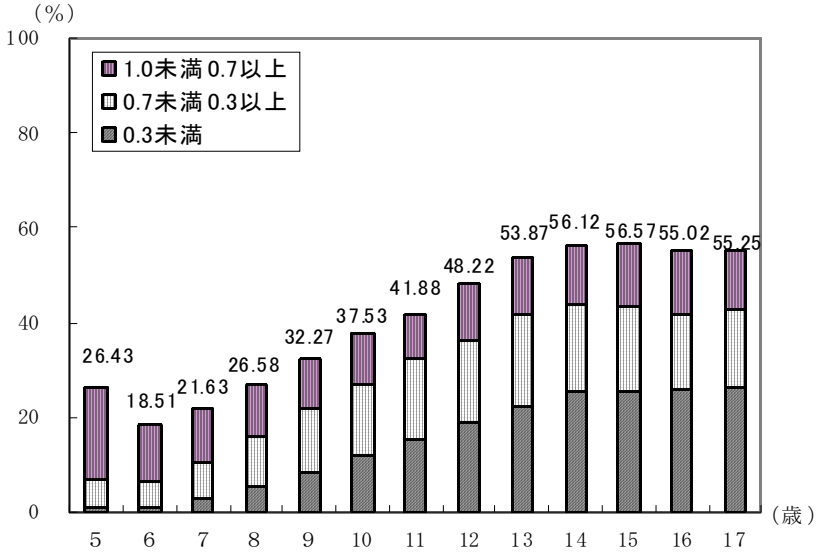
表８　裸眼視力1.0未満の者の推移

（％）

区分		昭和54	昭和55	平成２	平成12	18	19	20	21	22
幼稚園	計	16.47	19.84	18.63	28.69	24.07	26.21	28.93	24.87	26.43
	1.0未満0.7以上	12.21	14.85	13.79	21.47	17.99	18.89	22.03	18.81	19.83
	0.7未満0.3以上	3.91	4.36	4.46	6.77	5.60	6.81	6.11	5.45	5.81
	0.3未満	0.35	0.63	0.38	0.46	0.47	0.51	0.78	0.61	0.79
小学校	計	17.91	19.74	21.22	25.33	28.36	28.07	29.87	29.71	29.91
	1.0未満0.7以上	9.47	10.54	8.62	10.13	10.44	10.58	11.23	10.92	10.88
	0.7未満0.3以上	5.77	6.27	7.75	9.67	11.19	11.00	11.60	11.51	11.49
	0.3未満	2.67	2.93	4.85	5.54	6.73	6.49	7.05	7.27	7.55
中学校	計	35.19	38.12	41.58	49.99	50.13	51.17	52.60	52.54	52.73
	1.0未満0.7以上	9.65	10.68	10.08	11.29	11.89	13.26	12.38	12.54	12.07
	0.7未満0.3以上	12.47	13.13	13.91	16.94	17.84	17.57	17.80	18.03	18.41
	0.3未満	13.06	14.32	17.59	21.75	20.40	20.34	22.42	21.97	22.25
高等学校	計	53.02	55.46	56.38	62.45	58.65	55.41	57.98	59.37	55.64
	1.0未満0.7以上	11.12	11.38	10.22	11.93	14.26	12.40	12.55	13.59	12.98
	0.7未満0.3以上	15.61	15.56	16.18	15.66	17.56	16.86	17.07	18.11	16.75
	0.3未満	26.29	28.52	29.98	34.86	26.83	26.14	28.36	27.68	25.90

（注）四捨五入しているため計と内訳が一致しない場合がある。
以下の各表において同じ。

図５　年齢別　裸眼視力1.0未満の者の割合



○　「鼻・副鼻腔疾患」（表７）

平成22年度の「鼻・副鼻腔疾患」（蓄のう症，アレルギー性鼻炎等）の者の割合は，幼稚園3.39％，小学校11.66％，中学校10.67％，高等学校8.45％となっており，各学校段階で前年度より減少している。

○　「むし歯（う歯）」（表９，図６）

①　平成22年度の「むし歯」の者の割合（処置完了者を含む。以下同じ。）は，幼稚園46.07％，小学校59.63％，中学校50.60％，高等学校59.95％となっており，各学校段階で前年度より減少している。

②　「むし歯」の者の割合の推移をみると，30年前（昭和55年度）には，幼稚園を除く学校段階で90％を超えていたが，昭和50年代半ば以降は減少傾向にある。

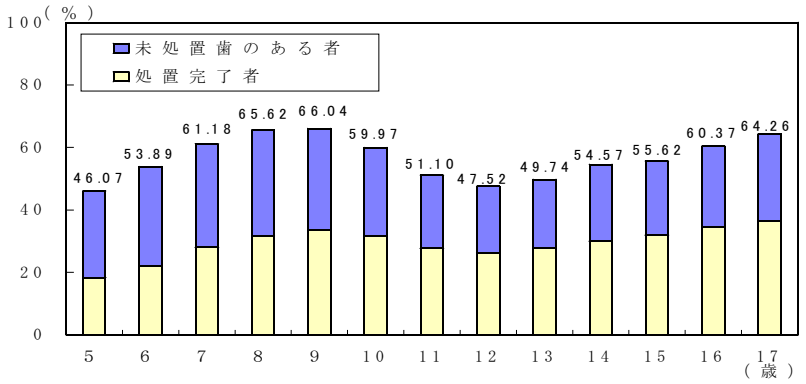
③　「むし歯」の者の割合を年齢別（図６）にみると，９歳が66.04％と最も高くなっている。また，処置完了者の割合は，９歳以降未処置歯のある者の割合を上回っている。

表９　むし歯（う歯）の者の割合の推移

（％）

区分		昭和55	平成２	平成12	18	19	20	21	22
幼稚園	計	86.54	80.41	64.43	55.20	53.70	50.25	46.50	46.07
	処置完了者	13.48	27.98	25.06	21.67	20.67	20.34	18.77	18.36
	未処置歯のある者	73.06	52.44	39.37	33.53	33.03	29.91	27.72	27.71
小学校	計	93.98	89.54	77.87	67.80	65.47	63.79	61.79	59.63
	処置完了者	22.24	36.26	37.84	32.87	31.21	30.89	30.32	29.20
	未処置歯のある者	71.74	53.28	40.03	34.93	34.26	32.90	31.47	30.44
中学校	計	93.91	89.96	76.85	59.66	58.06	56.00	52.88	50.60
	処置完了者	33.85	41.34	43.53	31.93	30.96	30.36	28.79	28.02
	未処置歯のある者	60.05	48.62	33.31	27.73	27.10	25.64	24.09	22.58
高等学校	計	95.90	93.65	85.03	70.06	68.48	65.48	62.18	59.95
	処置完了者	32.58	45.82	49.73	39.43	38.20	35.99	34.73	34.21
	未処置歯のある者	63.31	47.83	35.30	30.63	30.27	29.49	27.45	25.74

図６　年齢別　むし歯（う歯）の者の割合等



（注）10歳から12歳において割合が減少するのは，乳歯が生え替わることが影響していると考えられる。

○　「12歳の永久歯の一人当たり平均むし歯（う歯）等数」（表10，図７）

中学校１年（12歳）のみを調査対象としている永久歯の１人当たりのむし歯等数（喪失歯及び処置歯数を含む）は，前年度より0.11本減少し，1.29本と過去最低となっている。

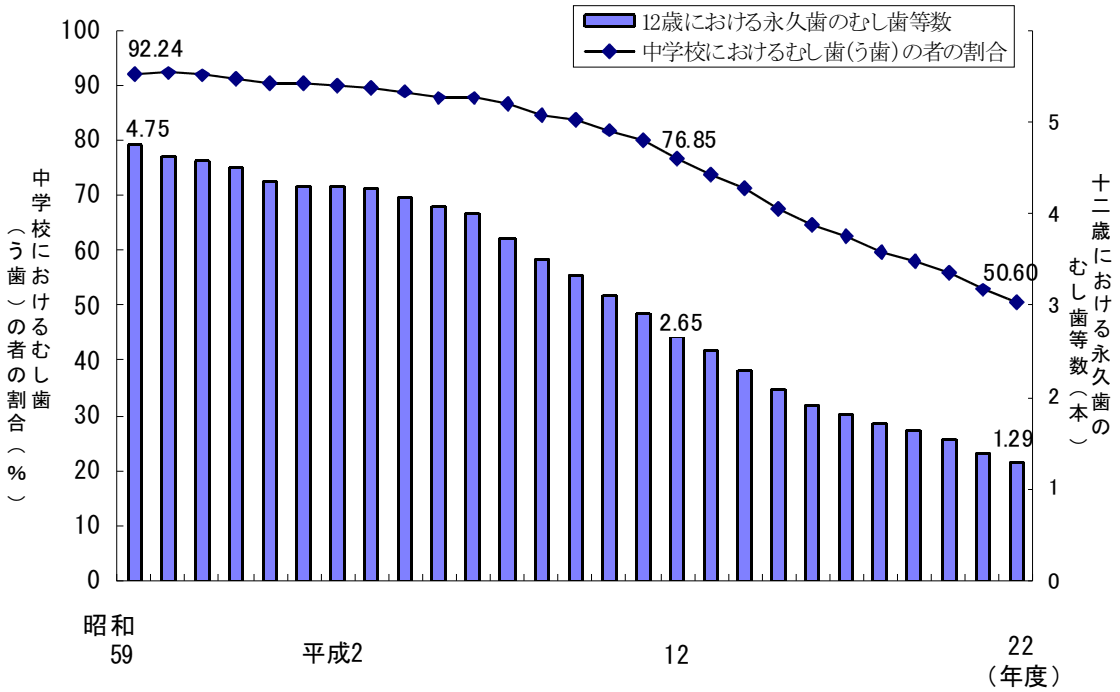
なお，昭和59年度（4.75本）以降減少している。

表10　12歳の永久歯の一人当たり平均むし歯（う歯）等数

（本）

区　　分		昭和59	平成２	平成12	18	19	20	21	22
計		4.75	4.30	2.65	1.71	1.63	1.54	1.40	1.29
喪失歯数		0.05	0.04	0.04	0.03	0.03	0.02	0.03	0.03
むし歯（う歯）	計	4.70	4.26	2.61	1.68	1.60	1.51	1.37	1.27
	処置歯数	3.35	3.04	1.88	1.08	1.01	0.96	0.87	0.81
	未処置歯数	1.35	1.22	0.73	0.60	0.59	0.55	0.49	0.46

図７　中学校におけるむし歯の被患率等の推移



○　「心電図異常」（表７）６歳，12歳及び15歳時のみ

平成22年度の「心電図異常」の割合は，小学校（６歳）で2.48%，中学校（12歳）で3.36%，高等学校（15歳）で3.16%となっており，前年度と比べると小学校及び高等学校では減少しており，中学校では増加している。

○　「寄生虫卵保有者」（表７）５歳から８歳時のみ

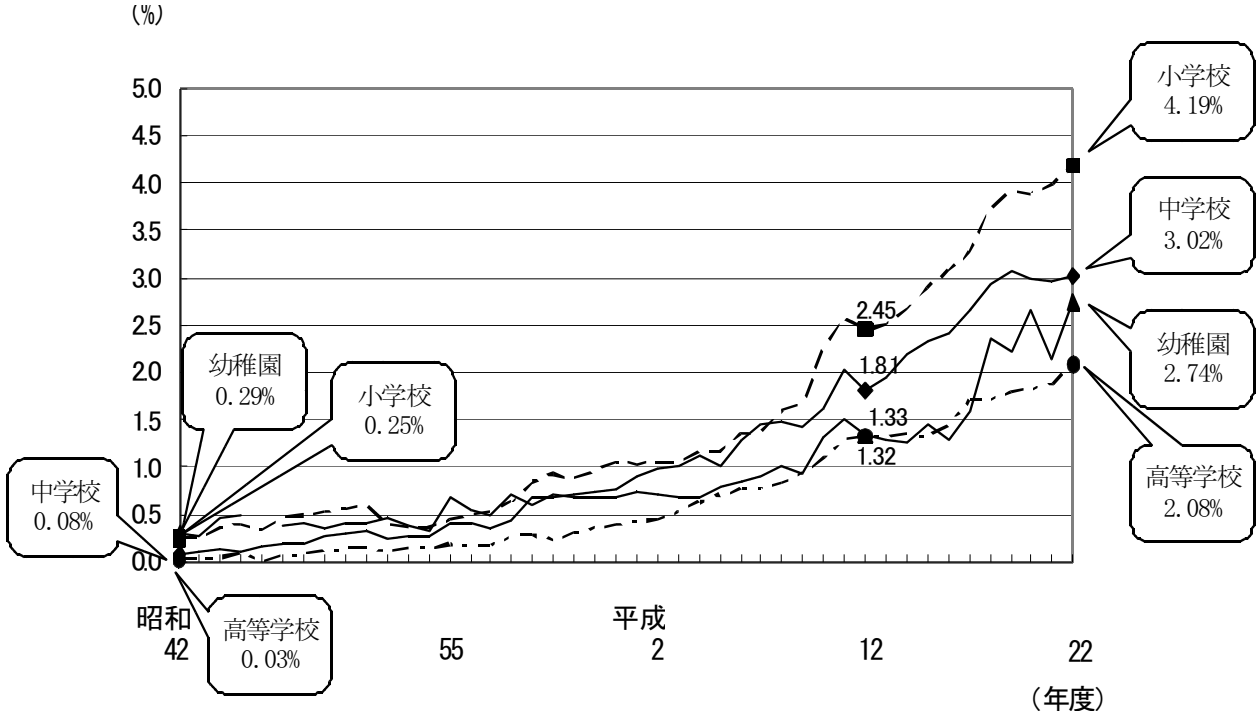
平成22年度の「寄生虫卵保有者」の割合は，幼稚園で0.09%，小学校で0.27%となっており，前年度と比較すると，幼稚園，小学校とも減少している。

○　「ぜん息」（表７，図８，図９）

①　ぜん息の者の割合は，前年度と比較すると，全学校段階で増加し，中学校を除いては過去最高（幼稚園2.74％，小学校4.19％，高等学校2.08％）となっている。

なお，昭和４２年度以降，全ての学校段階において増加傾向となっている。

図８　学校種別　ぜん息の者の推移

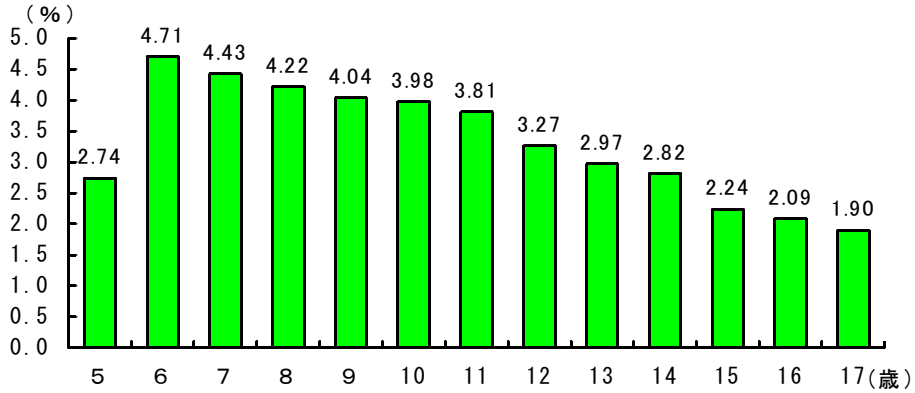


（注）昭和46年度は，幼稚園（5歳）については調査していない。

②　年齢別（図９）にみると，６歳から12歳の各年齢で３％を超えており，６歳が4.71％と最も高くなっている。

なお，６歳以降は年齢が進むにつれて減少している。

図９　年齢別　ぜん息の者の割合



３　肥満傾向児及び痩身傾向児の出現率（表11，図10，図11）

肥満傾向児の出現率は，男子は６歳，８歳から10歳，12歳から14歳で，女子は7歳から10歳，12歳から14歳，16歳及び17歳で，前年度より減少している。また，男子，女子共に，算出方法を変更した平成１８年度以降は，減少傾向となっている。

なお，算出方法を変更する前は，昭和５２年度以降，増加傾向であったが，平成１５年度あたりから減少傾向となっている。

痩身傾向児の出現率は，前年度と比較すると，男子は５歳，６歳及び16歳を除く各年齢で減少，女子は８歳から10歳，12歳及び15歳を除く各年齢で変わらずまたは増加している。また，男子，女子共に，算出方法を変更した平成１８年度以降は，増加傾向となっている。

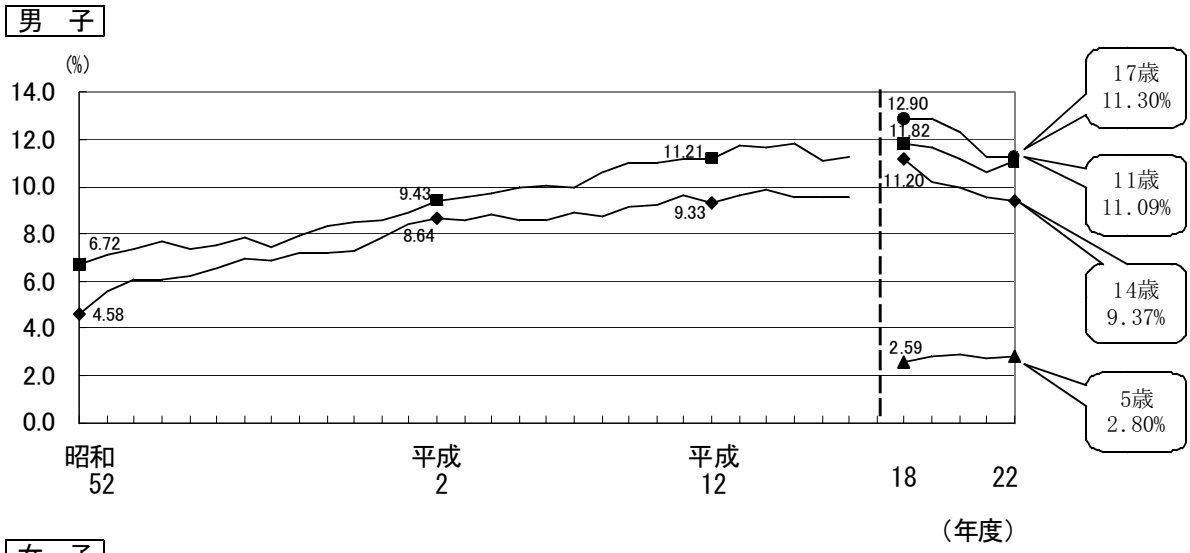
なお，算出方法を変更する前は，昭和５２年度以降，増加傾向であったが，平成１５年度あたりから減少傾向となっている。

表11　年齢別　肥満傾向児及び痩身傾向児の出現率

(%)

区分		男		女	
		肥満傾向児	痩身傾向児	肥満傾向児	痩身傾向児
幼稚園	5歳	2.80	0.42	2.83	0.51
小学校	6歳	4.46	0.48	4.23	0.62
	7	5.62	0.42	5.13	0.53
	8	7.20	0.95	6.90	0.93
	9	9.06	1.59	7.51	1.50
	10	10.37	2.36	8.13	2.61
	11	11.09	2.55	8.83	3.08
中学校	12歳	10.99	2.30	8.92	3.92
	13	9.41	1.53	7.96	3.84
	14	9.37	1.48	7.89	3.09
高等学校	15歳	12.40	2.11	8.59	2.37
	16	11.57	1.91	7.81	2.40
	17	11.30	1.67	8.14	1.81

図10　肥満傾向児の出現率の推移



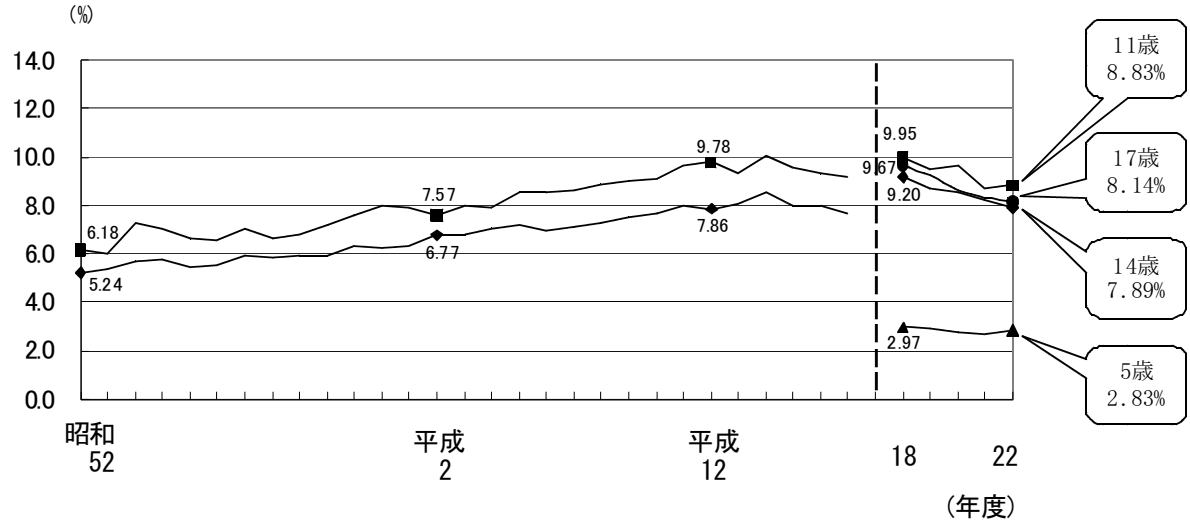
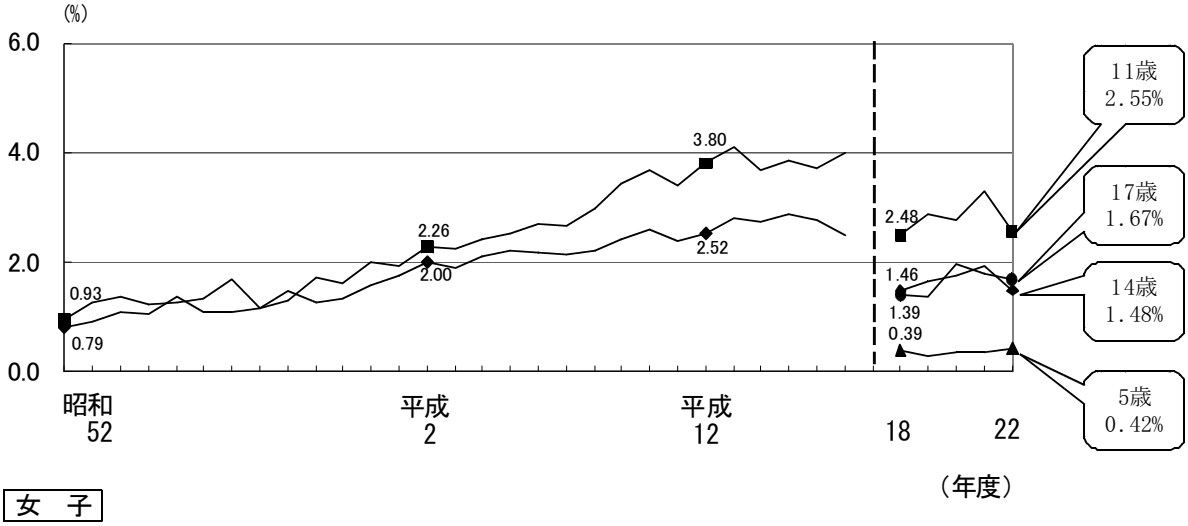
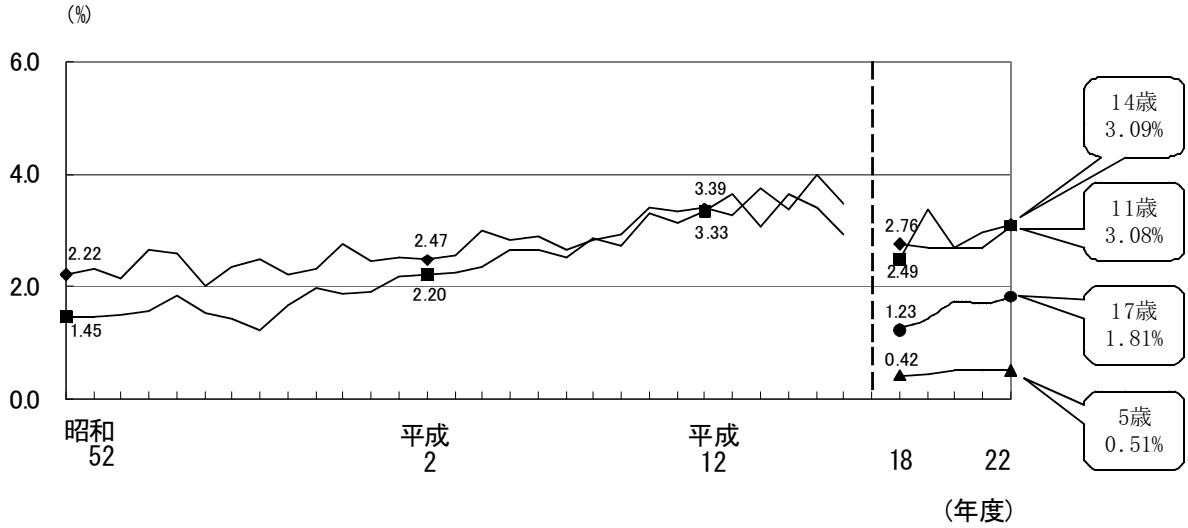


図11　痩身傾向児の出現率の推移

男　子



女　子



肥満・痩身傾向児については，平成17年度まで，性別・年齢別に身長別平均体重を求め，その平均体重の120％以上の体重の者を肥満傾向児，80％以下の者を痩身傾向児としていたが，18年度から，性別，年齢別，身長別標準体重から肥満度を算出し，肥満度が20％以上の者を肥満傾向児，－20％以下の者を痩身傾向児としている。

肥満度の求め方は以下のとおりである。

肥満度（過体重度）

＝〔実測体重(kg) －身長別標準体重(kg) 〕／身長別標準体重(kg) ×100（％）

※　身長別標準体重（kg）　＝ a × 実測身長（cm）　－ b

係数 / 年齢	男		女	
	a	b	a	b
5	0.386	23.699	0.377	22.750
6	0.461	32.382	0.458	32.079
7	0.513	38.878	0.508	38.367
8	0.592	48.804	0.561	45.006
9	0.687	61.390	0.652	56.992
10	0.752	70.461	0.730	68.091
11	0.782	75.106	0.803	78.846
12	0.783	75.642	0.796	76.934
13	0.815	81.348	0.655	54.234
14	0.832	83.695	0.594	43.264
15	0.766	70.989	0.560	37.002
16	0.656	51.822	0.578	39.057
17	0.672	53.642	0.598	42.339

出典：財団法人日本学校保健会『児童生徒の健康診断マニュアル（改訂版）』平成18年

＊（参考）平成22年度調査の平均身長の場合の標準体重

年齢	男			女		
	平均身長(cm)	平均身長時の標準体重(kg)	平均体重(kg)	平均身長(cm)	平均身長時の標準体重(kg)	平均体重(kg)
5	110.7	19.0	19.0	109.8	18.6	18.6
6	116.7	21.4	21.4	115.8	21.0	21.0
7	122.5	24.0	24.0	121.7	23.5	23.5
8	128.2	27.1	27.2	127.4	26.5	26.5
9	133.5	30.3	30.5	133.5	30.1	30.0
10	138.8	33.9	34.1	140.2	34.3	34.1
11	145.0	38.3	38.4	146.8	39.0	39.0
12	152.4	43.7	44.1	151.9	44.0	43.8
13	159.7	48.8	49.2	155.0	47.3	47.3
14	165.1	53.7	54.4	156.5	49.7	50.0
15	168.2	57.9	59.5	157.1	51.0	51.6
16	169.9	59.6	61.5	157.7	52.1	52.7
17	170.7	61.1	63.1	158.0	52.1	52.9